

CT検査により判明した 小腸腫瘍 (GIST)

医療法人博愛会 一関病院
及川 健一

GIST(消化管間質腫瘍)

消化管は食べ物を運ぶため、リズムを持った蠕動という運動を行っています。消化管の筋肉の中には、この運動の号令をかける細胞があり、「カハール介在細胞」と呼ばれています。GISTは、この細胞に異常が起きて腫瘍となったものと考えられています。

GISTの特徴

- GISTは消化管の癌が粘膜層にできるのに対して、粘膜下の筋肉層、粘膜筋板層に発生する。
- 血流が多い腫瘍で、症状として圧迫症状、出血症状などがある

GISTの発生頻度

- GISTはまれな病気で1年間で人口100万人あたり20人と推測され、全消化管腫瘍の0.2～0.5%だそうです。
- 年齢別では50歳代～60歳代に多く、部位別では胃が全体の約7割をしめている。ちなみに、小腸は全体の約2割です。

症例

- 症例：68歳、男性
- 既往歴：大動脈弁閉鎖不全症、高血圧
- 病歴：平成18年1月黒色便あり、上部・下部消化管検査(内視鏡)を行うが所見認めず。以後貧血の治療を消化器科で行っていた。平成18年12月、下血とふらつきの症状あり外科に転科になった。
- 症状：下血、貧血、腹部は平坦軟で圧痛なし。

使用装置

- 撮影装置:CT 東芝社製Aquilion16
- ワークステーション:ZIOSTATION
- 造影剤注入装置:根元杏林堂
デュアルショット

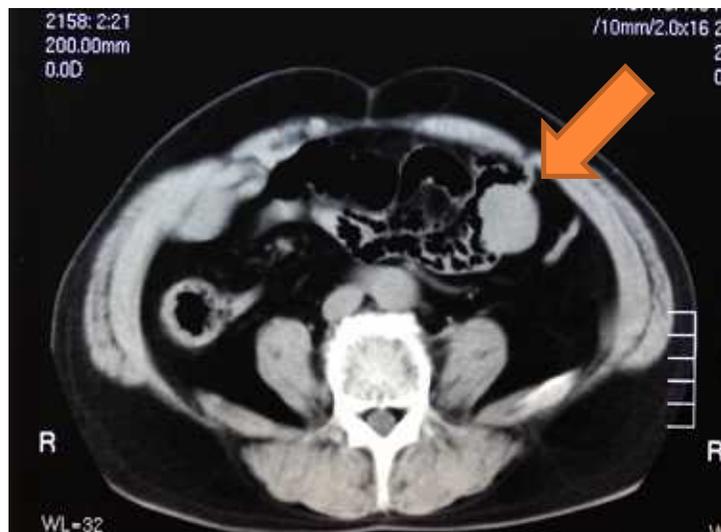
撮影条件

- 管電圧 120 kV
- 管電流 400 mA
- スキャン速度 0.5 sec/1回転
- ヘリカルピッチ 15
- 撮影スライス厚 1.0 mm × 16列
- 画像スライス厚 5 mm
- 再構成間隔 5 mm
- 造影剤 オイパロミン370 100 ml
- 造影剤注入速度 3 ml/sec
- デイレイタイム 35 sec 53 sec

Axial



35 s

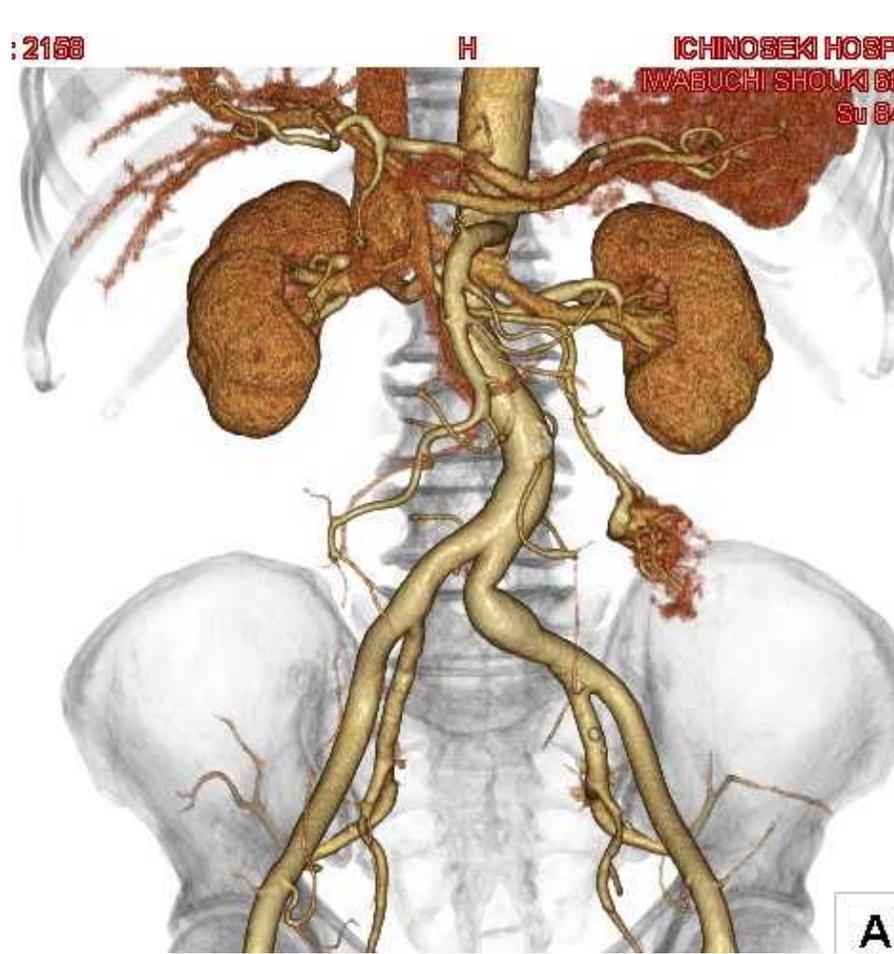


単純

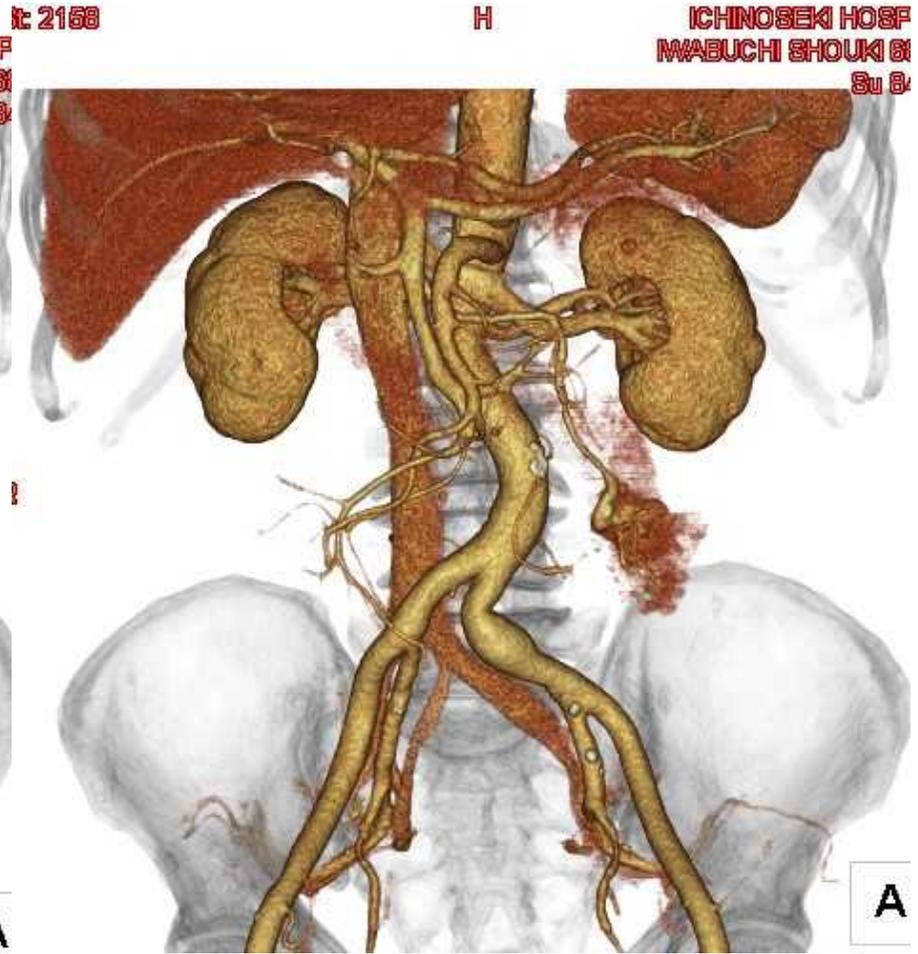


53 s

VR

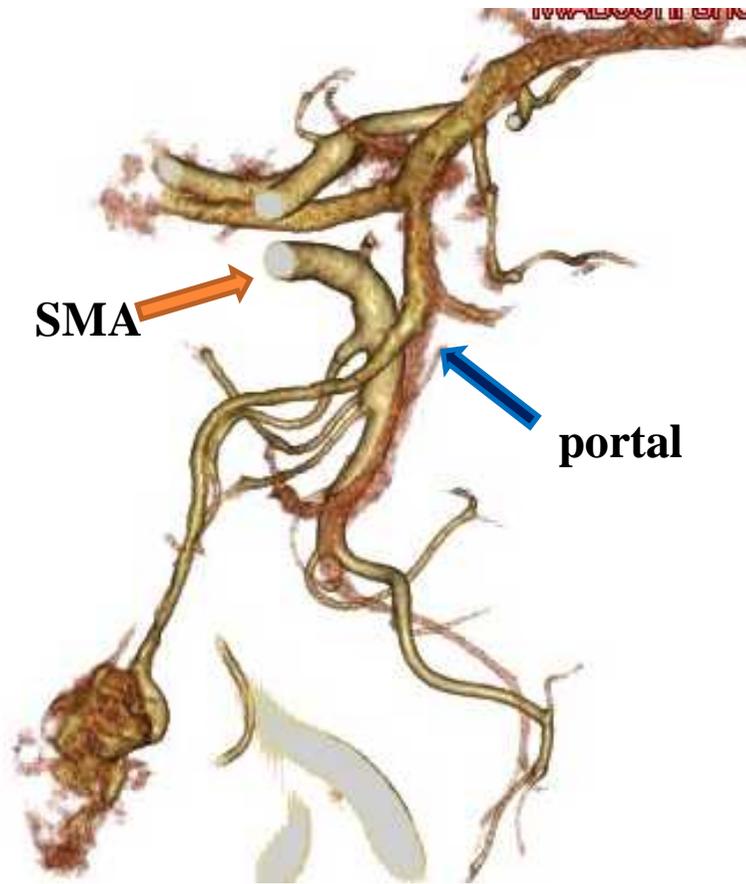


35 s

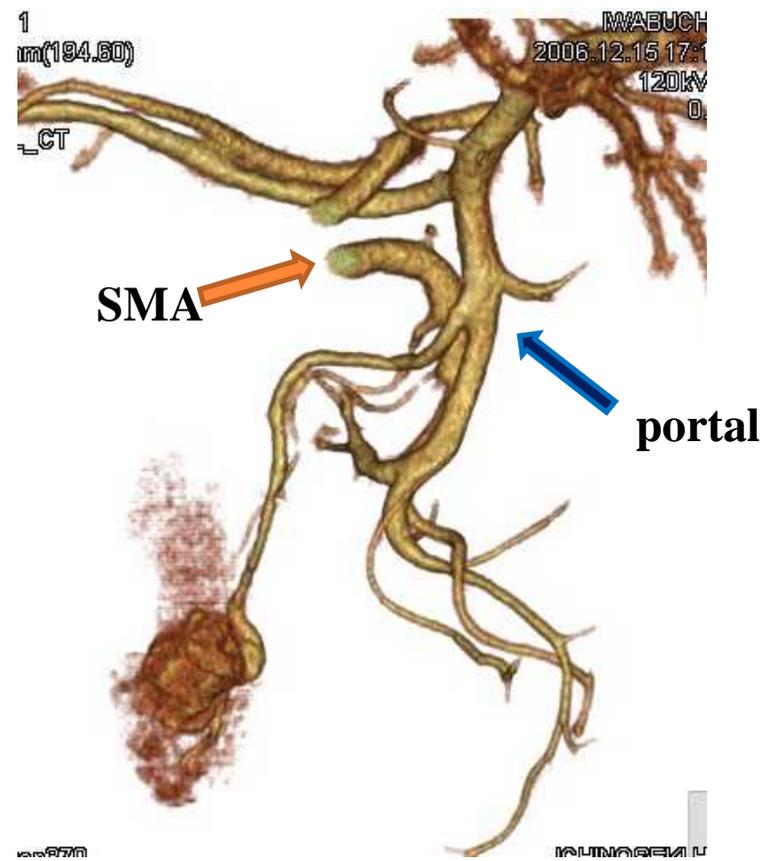


53 s

VR



35 s



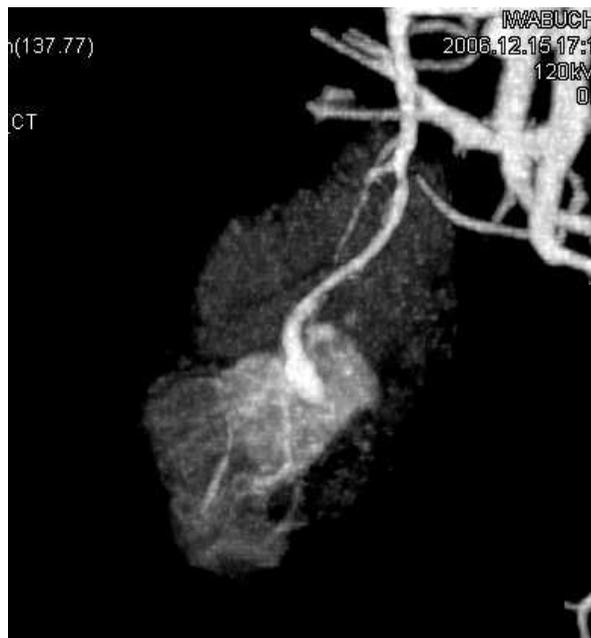
53 s

標本

CR



MIP
(53s)



まとめ

1. 触診、上部・下部消化管検査
(内視鏡)によって確定診断できない小腸GISTの症例をダイナミックCT撮影により描出できた。
2. 3D画像は、GISTの特徴である血流に富む腫瘍の局在診断に有用であった。

ご清聴ありがとうございました。